

外国にルーツを持つ子どもの支援活動に参加する 渡日経験者の語り

—かれらのライフコースと支援活動における当事者性—

御館久里恵

key words

.....
 子どもの支援
 ライフコース
 当事者性

1 研究の目的

外国にルーツを持つ子ども¹⁾の増加にともない、さまざまな支援活動がおこなわれるようになってきているが、それらの活動では、自らも外国にルーツを持つ人が支援者となり、運営を担っていることも多い。かれら²⁾はこれまでの人生をどのように生き、それをどのように意味づけ、またどのような思いを持って現在の支援活動をおこなっているのだろうか。

また、かれらの中には、出身国で教育を受けた後に渡日³⁾した人もいれば、学齢期（あるいはそれ以前）に渡日して日本で学校教育を受けた人、日本で生まれた人もいるが、特に子どもたちと同じライフ・ステージにおいて渡日した経験を持つ支援者の場合、その経験がどのように現在の支援活動と結びついているのだろうか。それを知ることで、マジョリティ側の視点とは異なる視点から支援活動を考えることができるのではないだろうか。

本論では、学齢期に渡日し、現在外国にルーツを持つ子どもの支援に携わっている大学（院）生に対するインタビュー調査から、かれらが自らの人生と現在の活動をどのように意義づけているのかを、「語り」を通して明らかにすることを目的とする。それによって、当事者でもある支援者の視点から、支援活動を捉え直したい。

2 先行研究

2.1 「当事者」がおこなう支援活動の意義

中西・上野（2003）によると、不足を抱えた現状を変えて新しい現実を作

り出そうとする時に人は初めて自分のニーズがわかり、「当事者」になるのだという。支援団体で育った子どもたちがスタッフとして運営に参画していったり、自らを運営主体として独立した当事者団体を立ち上げる例は各地で見られる。清水・家上(2009)は、神奈川県「いちよう団地」に住む外国人の子どもたちを中心に立ち上がった団体「すたんどばいみー」の軌跡をまとめている。ボランティアの教室に参加していた子どもたちが次第に運営に参画するようになり、さらに自分たちの団体を立ち上げていくなかで、ニーズを自ら決定するようになり、また直面する課題に対して「自分たちで乗り越えなければならない」という「当事者性」が浮かび上がってきたという。そして、異なる「当事者性」を持った者に寄り添って活動を展開し、多様な課題を持ち込みながら互いに言葉をより合わせていくことで、「当事者性」の集合から「当事者団体」となっていくということである。すなわち、当事者自らが活動の主体となることで、課題やニーズを自らのものとして、また他の「当事者」に寄り添ってニーズを捉え、活動につなげることができるのだと言えよう。

2.2 ライフ・ステージ／ライフコースという視点

蘭(2000)は、中国帰国者の生活世界を描くにあたっての重要な要素として「ライフ・ステージ」という概念を用い、それを幼年期・少年期・青年期・中年期・老年期の五つに分けている。これらのライフ・ステージごとに生活の場が異なり、それに応じた生活課題(学校生活、進学、就職、職場生活、結婚等)が日常生活を支配するという。

また、齋藤(2009)は、文化間移動をする子どもたちへの支援を「ライフコース」という視点から捉え直している。子どもに必要な力を「今」だけを見て判断するのではなく、彼らが歩んでいく人生のそれぞれのステージでの学びの様相を、社会的側面と心理的側面から捉えようとするものである。齋藤は2人の日系ブラジル人青年の体験談から、彼ら自身がライフコースのある段階において学ぶことに意義を見だし、学習に主体的に取り組んできた過程を明らかにしている。

このように、渡日者の支援を考えるにあたっては、その当事者の人生の流れとその時々を考慮することが重要であり、特にいまだ自らの人

生を振り返り意味づけをおこなうことのできない子どもについては、渡日を経験し成長した当事者のライフコースを知り、その視点から支援を考えることが重要な意味を持つと考えられる。

3 調査の概要

3.1 調査フィールドと調査協力者

関西地方にある A 国際交流協会において調査をおこなった。A 国際交流協会は 1995 年から子どもの支援事業を展開し、セミナーや出版物等を通して、当事者である子どもや「元子ども」を含めた関係者が、その声を発信してきた。

現在の子どもサポート事業としては、日本語・学習支援事業と、子ども母語事業の二つをおこなっている。日本語・学習支援事業は、大学（院）生ボランティアと、渡日を経験した大学生（ピアサポーター）が一緒に活動をおこなっている。子ども母語事業は、日本で生まれ育ったダブルの子どもも多く参加し、自分のルーツのことや文化を学ぶ場で、中国語、スペイン語、ポルトガル語がある。渡日を経験した大学（院）生が担当し、日本人ボランティアがアシスタントとして参加している。

A 国際交流協会に調査を依頼し、これらの事業に支援者として参加している J さん（ペルー出身）、K さん・L さん（中国出身）、M さん（台湾出身）を紹介してもらい、改めて個々に調査を依頼して承諾を得た。

3.2 調査方法

4 人に対し、渡日前から現在までのライフストーリーおよび現在の支援活動について、日本語で半構造化インタビューをおこなった。K さんと L さんは、本人たちの希望により二人一緒にインタビューをおこなった。所要時間は 1 時間半～2 時間であった。J さん、K さん、L さんについては、インタビューの前に支援活動の様子も観察させてもらった。

3.3 分析方法と視点

データを全て文字化し、語り手の発話ごとにコードをつけながら要約をくり返し、時間的配列による編集をおこなって、個々のストーリーを構成し

た。それをもとに、かれらのライフコースにおける、他者との関係構築（社会的側面）、アイデンティティ（心理的側面）、「学び」に向かった契機を考察する。次に、支援活動について語っている部分を拾い出し、共通して現れるカテゴリーを抽出して、かれらが考える支援活動の意義を明らかにする。

4 4人のライフコース

要約と編集によって再構成した調査協力者4名個々のライフコースを提示し、最後に、かれらのライフコースにおける他者との関係構築とアイデンティティ、および「学び」の契機についてまとめる。要約の過程で浮かび上がったコアとなる概念を、ゴシック体で示す。

4.1 Jさん

15歳で日本の高校にあたる教育をペルーで終えて、大学受験を目指していたが、事故に遭い、治療のため、既に渡日していた日系の母と兄を頼って、父と一緒に渡日した。A国際交流センターで日本語を勉強し、一年後に高校2年生に編入した。最初はみんな寄ってきたが言葉や文化（先輩・後輩関係など）の壁があって学校が嫌になった時もあった。2,3人話の合う友達ができから大学進学目標をもう一度持って勉強に戻ることができた。外国語大学に入学したが、例えば挨拶で交わすスキンシップ等が受け入れられず、無意識のうちに「日本用の自分」を作っていた。3年生になってからは本当の友達もでき、A国際交流センターでもボランティアとして手伝うようになった。先輩の調査に協力してから「母語」に興味を持ち、卒業論文は外国人児童と母語との関係について書いた。修士論文では母語とアイデンティティの関連性について書こうと思っている。将来的には、大学の先生になって、外国にルーツを持つ子どもをサポートするシステムづくり、特に人材育成に挑戦してみたい。今自分が持っているアイデンティティはひとつではないし、多様な背景を持っていることが自分の役に立っているし、これからもつなげていきたいと思っている。

4.2 Kさん

親の仕事の事情で12歳の時に渡日し、小学校5年生に入った。周りの子

が話しかけてくれたのは最初の2,3週間だけで、ショックを受けた。中国にいた時は成績が良かったのに日本に来て自信を喪失し、勉強にもやる気が出なかった。けんかもよくした。今なら何か言われても返し方があると思うが、当時は単純な言葉しか知らないからトラブルになったのだろう。日本語ができないことで厳しい労働環境にある親を見て、そこから抜け出そうと思い、また機械が好きだったこともあり、中学3年生ぐらいから工業専門学校を目指して勉強した。工業専門学校の受験には失敗したが、入学した工業高校で3年間の総合成績が1位だと大学への推薦枠を選べるというので、それを原動力に、車関係のエンジニアになる夢を持って頑張った。勉強で自信を取り戻せた。推薦枠で合格して機械工学科に入った。2年生の時にA国際交流センターの職員と知り合い、ここでの活動を始めた。就職活動の面接で、逆境を乗り越えてきた経験と自信をアピールし、自動車会社から内定をもらった。日本と中国を行き来できるような仕事ができればいいと思っている。来年か再来年には、中国に戻っている親を呼び寄せたい。将来は自分で自動車関係の会社を興したい。

4.3 Lさん

先に渡日していた残留孤児の祖母を頼って、10歳の時に両親と姉とともに渡日した。8カ月間財団で日本語を勉強した後、小学校4年生に入った。授業が全然わからずほとんど無言だった。小中学校時代はよく自分からけんかをした。後にバイト先で中学校時代の同級生と再会し、勘違いだったとわかったこともある。当時は言葉の壁があったのだろう。自分の気持ちを抑えてバリアを張るようになってしまった。中国人学生が多くいる高校に入って人生が変わった。白黒だった毎日が色で染められた。大親友ができ、先生にもたくさんの愛情をもらった。友人と中国語で会話すると心に響き、中国語をもっと勉強したいと思った。引揚者の枠で大学に入学し、中国語を専攻している。就職はメディア関係に興味を持っているが、このセンターで活動を始めてから教育分野にも関心が出てきた。過去に自分が先生にどう接してほしかったか、その経験を活かしたいと思う。中国で就職したほうがいいのかとも悩んでいる。半分ずつ生きてきたのでどちらでも大丈夫だと思うが、この十数年何事もなく生きてこられたのありがたいし、日本を選ぶのではない

かと思う。

4.4 Mさん

母が日本人と再婚したため、9歳の時に渡日し、年齢より一つ下の3年生に入った。言葉はわからなくても内容は一度勉強してわかったので、1カ月で4年生に上げてもらった。外国人が珍しくてみんな寄ってくるので嬉しかったし、友達もできた。かえって変な気遣いなく普通に接してくれたのがよかった。中学校は茶道部、高校は野球部で活動した。高校で日本生まれの中国人と、中国からの留学生に会えて嬉しかった。人とコミュニケーションをとるのが好きなので、大学は、語学だけでなく、それを社会でどう生かすかも学べそうな国際コミュニケーション学科を選んだ。母が亡くなってから中国語を話す人がいなかったの、大学で中国語を勉強して良かったと思っている。祖父母が話す原住民の言葉も覚えておきたくて、ときどき電話で教えてもらっている。今ハングルを勉強しているので、来年交換留学で韓国に留学したい。現在親権が祖父母にあり、そのまま台湾の徴兵制度の対象になるので、父との養子縁組の手続きを進めている。自分を大学まで行かせてくれた父を尊敬している。日本であまり挫折しなかったのは父のおかげだと思う。

4.5 ライフコースにおける、他者との関係構築とアイデンティティ、「学び」の契機

周りの人が「変な気遣いなく普通に」接してくれたことですぐに友人ができたMさんに対し、Jさん、Kさん、Lさんは、他者との関係がうまく築けなかった時期があった。それは、「言葉や文化の壁」から来るものだったのでだろうと振り返っている。そしてその結果、自分を傷つけないようにするために、「バリア」を張ったり、「日本用の自分」を作ったりするようになった。言葉の問題から授業もわからず、勉強への自信も失い、学ぶ動機を見つけることもできない状態であった。

Lさんは、高校で中国人の親友ができたことが転機となった。そして友と話す中国語の素晴らしさから、それをもっと学びたいと考えたことで大学進学へとつながっている。Jさんは高校、大学それぞれで他者との摩擦を感じ

たが、どちらも「本当の友達」ができることで、大学進学や研究テーマとしての母語への興味など、学びの目標が芽生えている。また、Kさんは、機械という自分の興味から車関係のエンジニアになるという目標を持つことで学びに向かっていった。大学に入ったMさんは、自らの母語と祖父母の言葉を大切に学び、語学やコミュニケーションへの興味を活かし、留学を目指している。

そして、現在Jさんは自分のアイデンティティはひとつではなく、その多様性が自分を支えていると言い、Kさんも「逆境を乗り越えてきた自分」に自信を持っている。

5 支援活動の意義づけ

4人の語りから共通して浮かび上がった支援活動についての意義づけを、三つのカテゴリーに分け、実際のかれらの語りを引用しながらまとめる。ここでもコアとなる概念をゴシック体で示す。

5.1 支援活動の目的と意義—孤独感の解消と自信の回復—

かれらは、自らが携わる支援活動の目的を、母語学習や日本語・教科学習支援そのものというよりも、少数点在型のA地域において、外国にルーツを持つ子どもたちが同じような背景を持つ仲間を見つけ、孤独感を解消することにあると考えている。そして、子どもたちが自らのルーツを知り、それに誇りをもつことで、自信につなげていきたいという。

Jさん：ここは少数点在地域なので、子どもがね、孤独を感じたりとか、実際僕もそういう体験をしたので、まあここに来て、自分は一人じゃないと、同じような背景を持つてる人もいる、じゃあそれをなんかその、かれらの自信につなげて行こうと思って。(母語支援の活動は)スペイン語を教えるのは目的ではないんですよ。

Kさん：子どもたちが、せっかく中国にルーツを持つてるので、それを大事にしてほしいし、さらにそれを生かして、将来、彼らにとって何かのプラス、のことになれば、いいなと思ってます。(後略)

センターで出会った子どもたちも、それ（自分が外国にルーツを持つこと）ですごく自信を失ってて、（中略）でも、ここの活動に参加することによって、同じ立場の子どもたちがここで出会うことによって、自分だけじゃないというのが、子どもたち同士で、わかりあえるというか、それは子どもにとって、すごく大事な時間だと思います。

Lさん：かれら同じような人が集まると、絆が深まると、自分は一人じゃないんだーっていう、孤独を感じないと思うんです。私が（中略）中国人がいる高校に逃げ込んだような状況で、そこから立ちなおる？そこから再スタート、私は遅かったです。かれらは、わりと早く、ここに来ることによって、すぐスタートを、始めれるんじゃないかなーって。

5.2 自分が支援活動をおこなうことの意義—経験の共有・共感と「ロールモデル」—

またかれらは、自らが支援活動をおこなうことで、同じような経験を共有し、自分の経験から話をしたり、共感することで相手の気持ちを楽しんだりすることができるという。そして自分の姿を子どもがモデルとして見ることができると考えている。

Kさん：午後（日本語・学習活動）に来てる子どもたちは、日本生まれの子よりも、途中から、最近日本に来た子どもたちが多くて、中国語よりも日本語を、勉強しないといけないという課題がありますね。今日も実際、あの僕とずっと、午後話してた高校生ですけど、これから大学受験、（中略）どういう学校があるか、受験のシステムとか、大学生活について色々、相談を受けてました。（中略）自分もあの、同じような経験を、してきましたので、すごく気持ちはわかりますね。

Mさん：（相手の子どもが）中国語じゃなくても、やっぱりその、同じ外国から来たっていうことで、俺もこんなやっただーみたいな感じで、でその子がこう、ちょっと、日本に来て不安なこととかも、ちょっ

と軽くなるんじゃないかなとか思ったりもするし、ま、一応大学行ってるから、こう、その子どもも、じゃ、勉強とかしたら、日本でも大学行けるかなーとか、思って、まあこう見本になる、手本になるように。それが僕のいる意味。そう思います。

5.3 自分にとっての意義—自分も学ぶ場・過去の自分と対峙し自己を見つめる場—

この活動は子どもたちのためだけではなく、かれら自身にとっても学ぶことができる場であり、心を開くことができる場である。また子どもたちと接することで、過去の自分と対峙し、それを意味づけ、そして現在の自分自身につなげている。

Lさん：バイトっていうよりも、私が、勉強できる場所なんですよ。はい。他のバイトで稼ぐ人よりも私のほうが、たぶん、ぜんぜん儲かってると思います。〈笑〉（後略）

同じような境遇にあった子が来ると、あまり話したがらないから、（中略）かれらを見てると、すごくなにか、自分が当時そうだったなーとか、でももし、心開いていればっていうこと最近思って。なので、（自分もここで）心を開くようになった。

Mさん：色んな人と接するチャンスが、多いじゃないですか。交流センターだし。だからそれは自分にとってもいいことかなと思って。ここが自分の居場所になれるねと思って。（中略）第二の家みたいな。なんか、ここに来たらこうなんか、落ちつけるし、自然な自分出せるし、それは多分ボランティアする側もされる側も。

Kさん：人間はたぶん、ひとつの、苦しい状況を乗り越えて、すごくほっとして、時間が経つと、前に苦しかったこと忘れてりするんですけど、でもここに来ることによって、常に過去の自分が境遇、経験してたことを、今経験してる子どもに出会えるので、過去自分が、困難を乗り越えた時の気持ちを、もう一度、思い出させてくれます。それがすごく

まあ、大学の3年間、大学で勉強する原動力になったし、夢に向かって頑張る原動力にもなりました。

6 考察

6.1 ライフコースにおける「主体的な学び」の契機—「当事者性」の発現—

かれらの語りから、友人関係を築けること、学ぶ動機や目標を持つことが、かれらの生活に大きく影響し、自己肯定感や自信につながっていることがわかる。学ぶ動機や目標は、JさんやLさんのように他者との関係がきり結べたことで生まれてくる場合もあれば、Kさんのように現状を打開したいという思いと、自身の将来像を描くことによって生まれる場合もある。かれらは自ら学ぶことの意味を見だしており、それは自分の興味やルーツなど、自分自身のアイデンティティと深く結びついていた。かれらがこのように「主体的な学び」（齋藤，2009）に向かっていったのは、自らの現状を認識し、望ましいと考える状況になるために何が必要かという「ニーズ」に気づくことができたからではないだろうか。すなわち、自分の持つ「当事者性」を自覚できたということであろう。進路選択というライフ・ステージの節目は、自ら選択し行動できる機会であり、かれらは自らのニーズに合わせて、工業高校に入り大学の工学部を目指す、中国人学生が多くいる高校に入るといった選択をし、行動をおこしたのである。

6.2 「当事者性」の共振と支援活動の意義の共有

かれらは支援活動を通して自らも学び、自らを開き、過去の自分自身と対峙し続けている。その意味でかれらは「当事者」であり続けていると言える。自らの歩んできたライフコースにおける経験と目の前にいる子どもたちとを重ね合わせ、自らの「当事者性」と子どもの「当事者性」とを共振させながら、活動の場において常に自らの経験の意義を再構築し続けているのである。

A 国際交流協会はこの事業の目的を、子どもたちが「同じ背景や悩みを持つ仲間（ピア）や、自分の将来を投影できる人（ロール・モデル）と出会い、自己肯定感を育むことができる場」にすることとしている（A 国際交

流協会, 2008)。かれらは子どもたちと「当事者性」を共振させる中で、協会が考えるこの活動の意義を実感し、それに同調し、「同じ立場の子ども」「自分が見本になる」といった語りを支援者たちの間で繰り返し、共有しているのだろう。しかしこれらの語りもまた、かれらが活動が続けるなかで、あるいはかれら自身が次のライフ・ステージに進んでいくなかで、変化するものであるはずである。

7 おわりに—支援活動への示唆—

以上、本論では、学齢期に渡日し、現在外国にルーツを持つ子どもの支援に携わっている大学（院）生の語りから、かれらのライフコースと、その中での人間関係やアイデンティティ、学びの契機、そして自身が携わる支援活動の意義づけを明らかにしてきた。

調査の結果から支援活動に示唆されることは、子どもたちにはまず、人間関係を築き孤独感を解消する場が必要であるということである。また、子どもたちが自分のニーズから学ぶことに意味を見出し、それをこれからのライフ・ステージに結びつけて選択し行動するといった、「主体的な学び」に向けて支援していくことが必要である。そのためには、支援者がニーズや目標を決めるのではなく、子どもたち自身に気づきを促し、決定権を委ねるべきであろう。渡日を経験した支援者は、子どもたちと「当事者性」を共振させながら、自らの経験と現在の活動の意義を構築していたが、そうでない支援者もまた、活動を通して学び、自己を振り返り、常に経験や活動の意義を考えていく姿勢が求められるだろう。

〈注〉

- 1) 外国から来た子どもだけでなく、両親あるいはそのどちらかが外国出身者である日本生まれの子ども等も含む。
- 2) 本論では、「彼」と「彼女」をあわせて「かれら」と表記する。
- 3) 本論では、フィールドである A 国際交流協会、およびその所在地の自治体を用いている用語に合わせ、「来日」ではなく「渡日」を用いる。

〈付記〉

本論は、平成 20-21 年度科学研究費補助金（若手研究(B) 課題番号 20720139) の助成を受けておこなわれた研究の成果の一部である。

〈引用・参考文献〉

- 蘭 信三 (2000) 「中国帰国者とは誰なのか、彼らをどう捉えたらよいのか」 蘭 信三 (編) 『「中国帰国者」の生活世界』 行路社, 19-47.
- 齋藤ひろみ (2009) 「子どもたちのライフコースと学習支援－主体的な学びを形成するために」 齋藤ひろみ・佐藤郡衛 (編) 『文化間移動をする子どもたちの学び 教育コミュニティの創造に向けて』 ひつじ書房, 251-265.
- 清水陸美・家上幸子 (2009) 「「すたんどばいみー」の活動の軌跡—外国人の子どもたちによる「自治的運営組織」から「当事者団体」へ—」 清水陸美・「すたんどばいみー」 (編) 『いちょう団地発！外国人の子どもたちの挑戦』 岩波書店, 1-16.
- 中西正司・上野千鶴子 (2003) 『当事者主権』 岩波書店.
- A 国際交流協会 (2008) 『地域における外国にルーツをもつ子どもの居場所づくり～子どもサポート事業のあゆみ 2006・2007～』

(おたち くりえ 鳥取大学国際交流センター 講師 日本語教育)